

中村 早百合

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士後期課程 1 年

amaryllis4219@gmail.com

発表要旨

本発表は、以下の 2 つのことを論点とする。まず、日本語の語彙的複合動詞の自他交替の観点から「他動性調和の原則」(影山 1993)を見直し、語彙的複合動詞の下位分類の一つである主題関係複合動詞の構造が二種類存在することを論じ、その上で同原則は一方の構造に対してのみ適用されることを提案する。次に、日本語の語彙的複合動詞の主要部は原則的に後項動詞 (V2) であるという前提のもとで、従来語彙的複合動詞として扱われてきたものの一部は、付加構造で表される統語的複合動詞として再分析されるという可能性を示す。

本発表の構成

1. 本研究の目的 ※上記「発表要旨」参照
2. 本研究の主張 1：他動性調和の原則と語構造
3. 本研究の主張 2：語彙的複合動詞の主要部
4. 今後の課題

2. 本研究の主張 1：他動性調和の原則と語構造

2.1. 本研究の目的

日本語の語彙的複合動詞の構造が二種類存在することを論じ、その上で他動性調和の原則は一方の構造に対してのみ適用されることを提案すること。

2.2. 他動性調和の原則

(1) 「他動性調和の原則」(影山 1993)

：複合動詞 V1+V2 において、V1 と V2 は外項の有無に齟齬があってはならない(斎藤 2014)。

(2) V1 - V2

- a. [+外項] - [+外項]：押し倒す, 切り取る, 引き抜く, etc.
- b. [-外項] - [-外項]：崩れ落ちる, 鳴り響く, 立ち並ぶ, etc.
- c. [+外項] - [-外項]：*押し倒れる, *折り曲がる, *洗い落ちる, etc.
- d. [-外項] - [+外項]：*崩れ落とす, *折れ曲げる, *売れ飛ばす, etc.

(3) 他動性調和の原則の反例

a. [+外項] - [-外項]

(花火が)打ち上がる, (ひもが)引きちぎれる, (角が)突き出る,
(剣が)突き刺さる, (鉄板が)積み上がる, etc.

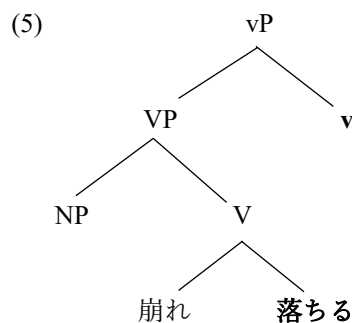
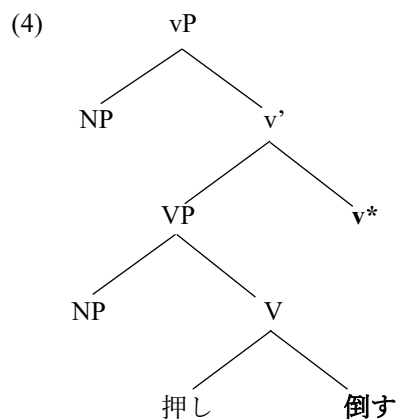
b. [-外項] - [+外項]

(ほこりを)舞い上げる, (糸を)絡み付ける, (汚水を)垂れ流す,
(汗を)飛び散らす, (心を)落ち着ける, etc.

2.3. 先行研究の見解：Saito (2016) , 史 (2015) による分析

2.3.1 Saito (2016)：選択制限による他動性調和の原則の説明

V1 と V2 が共に統語的に可視的であり、双方が v/v* との選択制限を満たさなければならないと仮定。
なお、他動性調和の原則の反例については言及せず。



本研究での前提 ① V1 と V2 からなる語彙的複合動詞の主要部は V2 である。

② 選択制限は主要部と主要部の間に生じる。

問題点 ① v/v*が、主要部でない V1 と選択制限を結ぶという仮定は不自然であるということ。

② 他動性調和の原則の反例が説明できないこと。

2.3.2 史 (2015)：語の意味の希薄化と自他交替による他動性調和の原則の反例の説明

語彙的複合動詞が自他交替する要因は、V1 または V2 の語彙的意味が希薄化する（語本来の意味が薄れる）ことであるとして、他動性調和の原則の反例を説明。

主題関係複合動詞の場合：V1 が希薄化

(6) a. (花火を/が)打ち上げる/打ち上がる

b. (お腹を/が)引き締める/引き締まる

※希薄化の判断テスト（史 2015）

テ形連接との言い換え不可：N を V1V2－*N を V1 て V2

「*花火を打って上げる」…希薄化している

アスペクト複合動詞の場合：V2 が希薄化し、アスペクト的意味を表す

(7) (セーターを/が)編み上げる/編み上がる

問題点：V1 の語彙的意味が希薄化していないのにもかかわらず自他交替する語彙的複合動詞は、
多数存在すること。

- (8) a. (ナイフを/が) 突き刺す/突き刺さる
b. (レンガを/が) 積み重ねる/積み重なる
c. (ひもを/が) 引きちぎる/引きちぎれる

希薄化の判断テスト

- (9) a. ナイフを突いて刺す
b. レンガを積んで重ねる
c. ひもを引いてちぎる

2.4. 本研究の提案：語彙的複合動詞の語構造

(10) 主題関係複合動詞を、V2 の自他交替の可否と V1 の自他の区別によって 4 つのタイプに分類。

	自他交替する	自他交替しない
V1 が他動詞	タイプ 1 打ち上がる/打ち上げる 積み重なる/積み重ねる 突き刺さる/突き刺す	タイプ 3 *張り上がる/張り上げる *切り倒れる/切り倒す *押し戻る/押し戻す
V1 が自動詞	タイプ 2 舞い上がる/舞い上げる 飛び散る/飛び散らす 絡み付く/絡み付ける	タイプ 4 腫れ上がる/*腫れ上げる 駆けあがる/*駆け上げる 舞い戻る/*舞い戻す

(11) 分散形態論（Distributed Morphology, DM cf. Marantz 1997）の仮定：

動詞は Root と機能範疇 v から成る。

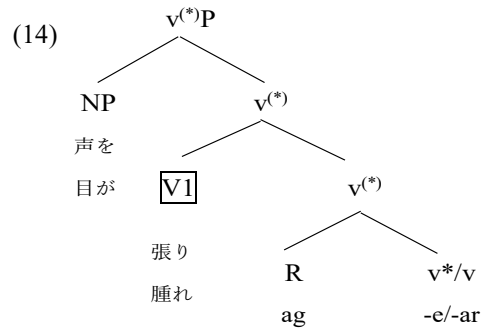
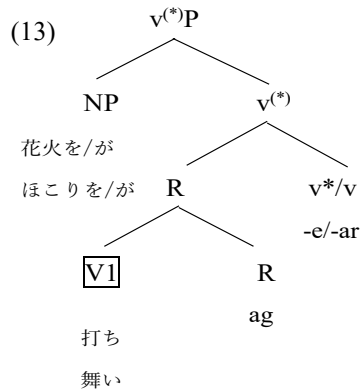


(12) 前提 ① 主題関係複合動詞において、V1 は V2 を修飾する。

② 修飾は付加構造で表される。

予測されること：V1 は R または v/v* に付加する。

主題関係複合動詞の語構造



複合動詞の V2 が(11b)のように「上げる／上がる」の場合

(13) V1 が R に付加する場合

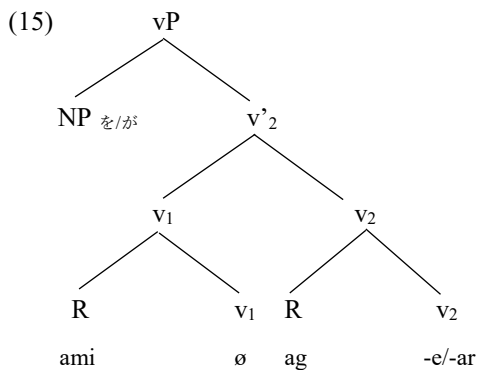
- ・ v*/v との間に**選択制限**が生じない。→ **自他交替**が起こり得る。
 - ・ V1 は R を修飾するので「**様態・付帯状況**」を表す。
- e.g. 「花火を打ち上げる／花火が打ち上がる」「ほこりを舞い上げる／ほこりが舞い上がる」

(14) V1 が v(*)の投射に付加する場合

- ・ v*/v との間に**選択制限**が生じる。→ **自他交替**が起こらない。
 - ・ V1 に動作主性があれば、[+CAUS] の v*を選択して「**手段**」を表す。
- e.g. 「声を張り上げる／*声が張り上がる」
- V1 に動作主性がなければ、[-CAUS] の v を選択して「**原因**」を表す。
- e.g. 「*目を腫れ上げる／目が腫れ上がる」

結論：他動性調和の原則は(14)の場合でのみ成立する。

アスペクト複合動詞の語構造



2.5 まとめ

- ・ 日本語の主題関係複合動詞の構造は二種類存在する。
- ・ 他動性調和の原則は一方の構造に対してのみ適用される。

3. 本研究の主張 2：語彙的複合動詞の主要部

3.1. 本章の目的

日本語の語彙的複合動詞の主要部は原則的に後項動詞（V2）であるという前提のもとで、従来語彙的複合動詞として扱われてきたものの一部は、付加構造で表される統語的複合動詞として再分析されるという可能性を示すこと。

3.2. 先行研究の主張：松本（1998, 2009）

一部の語彙的複合動詞の主要部は V1 である、という主張。

（V1 が意味的主要部で、V2 は V1 に副詞的・比喩的意味を加える）

e.g. 「踊り狂う」…「狂ったように踊る」

「書き殴る」…「殴るように書く」

3.3. 本研究の提案：V2 主要部の観点からの再分析

(16) 主要部はあくまで統語的概念であることから、松本（1998, 2009）による V1 主要部の例を

(17)と(18)の二種類に分類・再分析。

V2 主要部の語彙的複合動詞として再分析

(17) 自動詞+自動詞：a. 踊り狂う、晴れ渡る

他動詞+自動詞：b. 思い乱れる

補文または付加構造で表される統語的複合動詞として再分析

(18) 他動詞+他動詞：a. 書き殴る、見上げる

自動詞+他動詞：b. 居合わせる

(19) 持ち帰る、連れ帰る、持ち寄る、持ち去る、連れ去る

3.3.1 V2 主要部の主張－格付与の観点から

(20) a. 太郎は コーヒーを 服に 染み_{V1} 付けた_{V2}。

… 格付与のため主要部は V2

b. 魚の骨が 喉に 突き_{V1} 刺さった_{V2}。

… V1 は対格付与せず主要部は V2

(21) a. 太郎は パーティーで 踊り_{V1} 狂う_{V2}。

… 主要部は V2 であることに矛盾はない

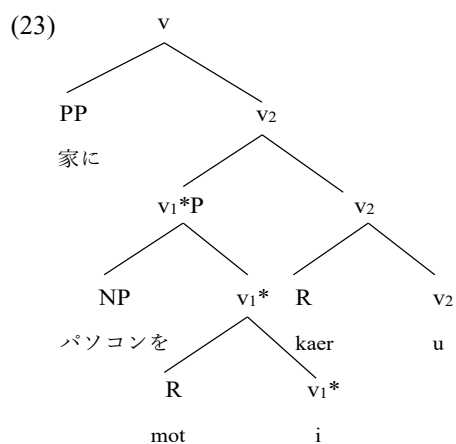
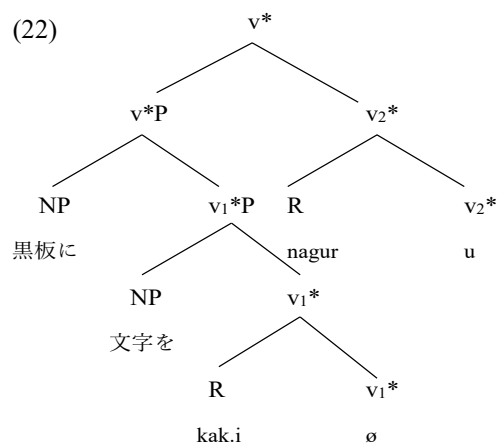
b. 太郎は どちらにしようか 思い_{V1} 乱れる_{V2}。

… V1 は対格付与せず主要部は V2

3.3.2 統語的複合動詞（付加構造）としての再分析

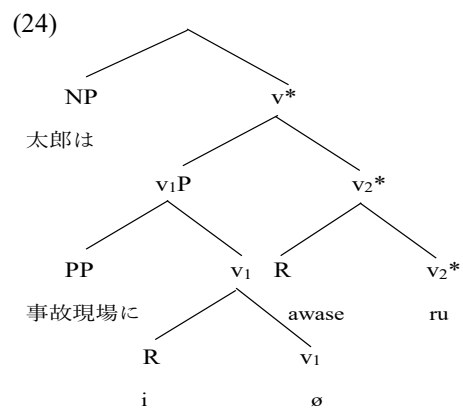
(22) 太郎は 黒板に 文字を 書き_{v1} 殴る_{v2o}

(23) 太郎は 家に パソコンを 持ち_{v1} 帰る_{v2o}



3.3.3 統語的複合動詞（補文構造）としての再分析

(24) 太郎は 事故現場に 居_{v1} 合わせる_{v2o}



3.4. まとめ

- ・原則的に語彙的複合動詞の主要部は V2 である。
- ・統語的複合動詞（付加構造・補文構造）として再分析され得る語彙的複合動詞がある。

4. 今後の課題

4.1. 「他動性調和の原則と語構造」に関して

V1 の位置を決める独立の根拠について

：R に付加する V1 と v/v* に付加する V1 を区別する要因は何か。

※V1 ごとに決まっているわけではない。

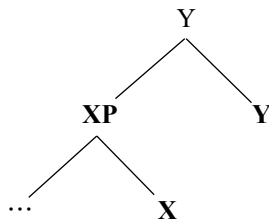
e.g. 「押し上がる／押し上げる」→ (10)タイプ 1 (R に付加)

「*押し戻る／押し戻す」→ (10)タイプ 3 (v/v* に付加)

4.2. 「語彙的複合動詞の主要部」に関して

V1 が V2 に編入することに対する理論的問題について

：付加詞の中から要素を編入できるのか (cf. Huang 1982)。



参考文献

Huang, C.-T. James (1982). “Logical relations in Chinese and the theory of grammar.” Ph. D. dissertation, MIT.

Reproduced by Garland (1998).

影山太郎 (1993). 『文法と語形成』 ひつじ書房, 東京.

Marantz, Alec (1997). “No Escape from Syntax: Don’t Try Morphological Analysis in the Privacy of Your Own Lexicon,” University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics 4.2: 201-225.

松本曜 (1998). 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』 114 : 37-83.

松本曜 (2009). 「複合動詞「～込む」「～去る」「～出す」と語彙的複合動詞のタイプ」『語彙の意味と文法』 175-194. くろしお出版, 東京.

斎藤衛 (2014). 「複合動詞の形成と選択制限 他動性調和の原則を手掛かりとして」『複雑述語研究の現在』 ひつじ書房, 東京.

Saito, Mamoru (2016). “(A) Case for Labeling: Labeling in Languages without ϕ -feature Agreement,” Linguistic Review 33: 129-175.

史曼 (2015). 「語彙的複合動詞の自他交替について」『語彙意味論の新たな可能性を探って』 開拓社, 東京.